

昭和55年5月20日第三種郵便物承認  
平成31年1月1日発行  
（毎月1回1日発行）通巻469号

2019  
**1**

茶のある  
くらし

# なごみ

大特集 茶人が愛した素朴のうつわ  
**高麗茶碗**  
特別付録 なごみ手帳



和

ある井戸茶碗との出会いをきっかけに、陶芸の道に分け入った  
辻村史朗さんが、大井戸茶碗 銘「対馬」と対峙。  
土と向き合い、自由に創作を重ねる陶芸家と、名もなき朝鮮陶工との対話。  
撮影協力=湯木美術館



銘「対馬」を観る

陶芸家・辻村史朗  
大井戸茶碗



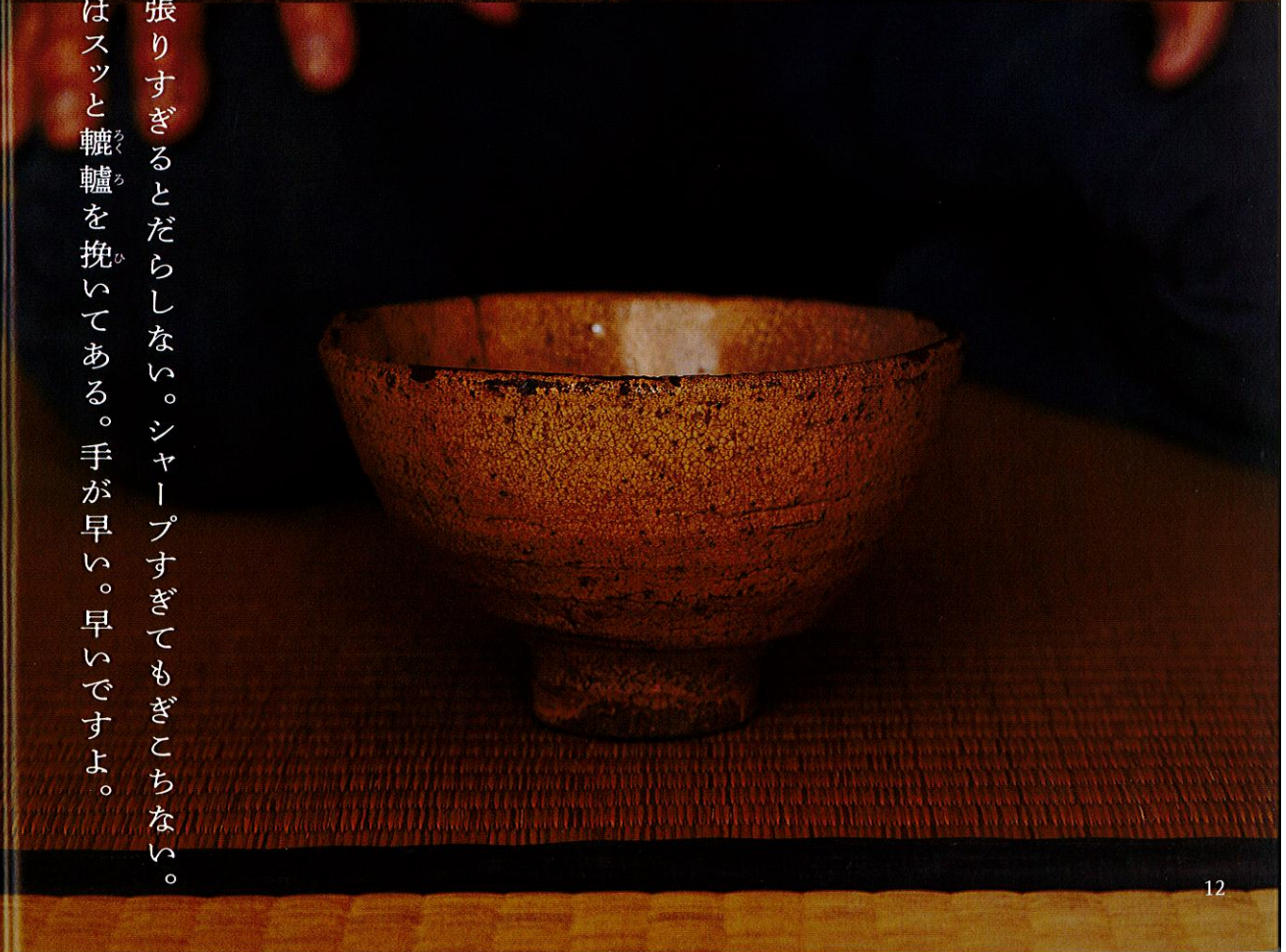
大井戸茶碗 銘対馬 湯木美術館 朝鮮時代 16世紀 口径14.1

作り手が考えていたのは手間をかけたこと。  
土に石や木が混ざっていてもこだわらない。  
だから大きい貫入、小さい貫入、奥行きが生まれる。

\*茶碗表面に現れたヒビ

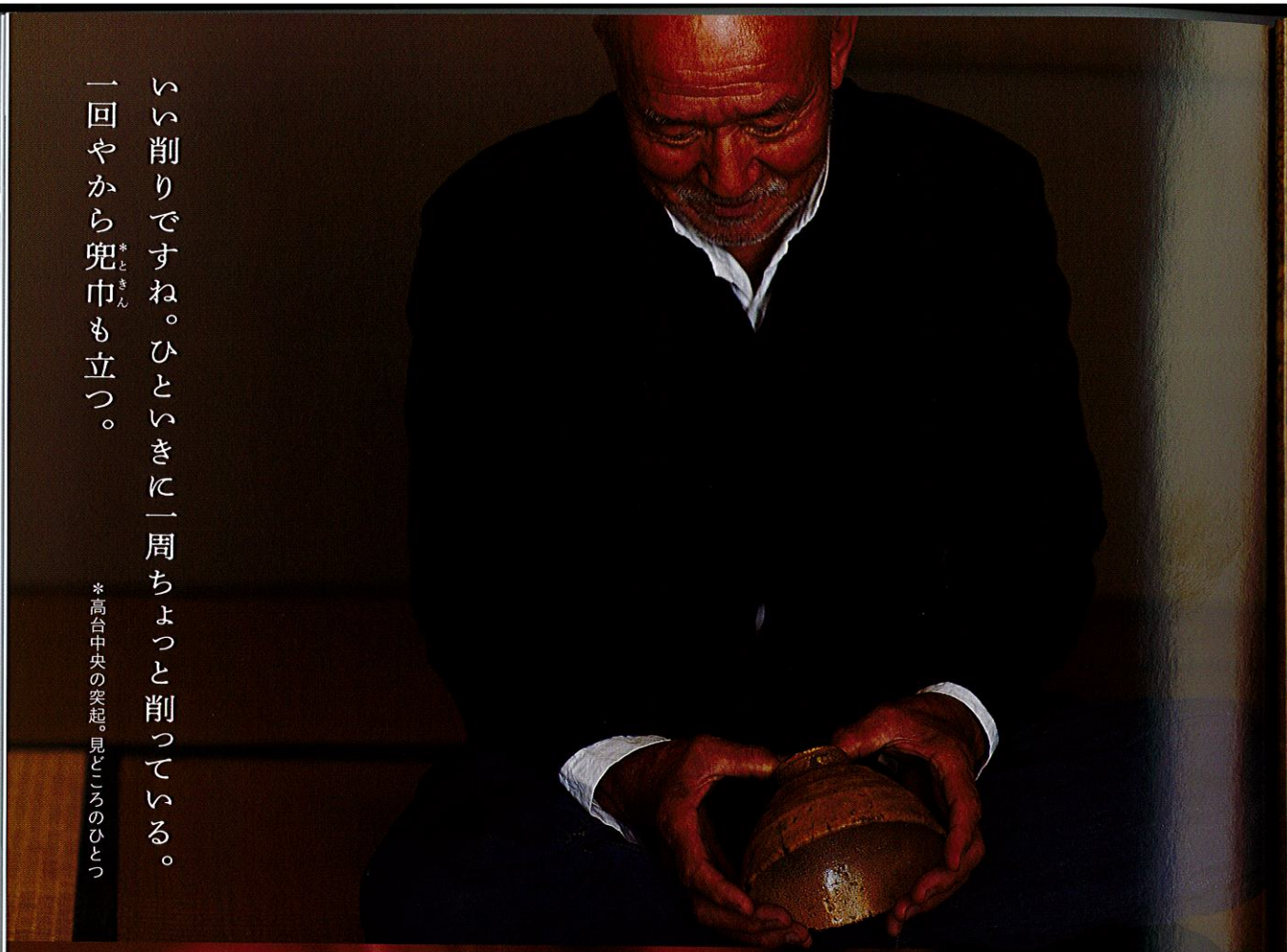


腰が張りすぎるとだらしない。シャープすぎてもぎこちない。  
対馬はスツと轆轤を挽いてある。手が早い。早いですよ。



いり削りですね。ひといきに一周ちよつと削っている。  
一回やから兜巾も立つ。

\*高台中央の突起。見ど「ろ」のひとつ



ダメだったら次、次、次。  
この対馬を作った陶工も、  
似たような  
心境だったんじゃないか。

僕が井戸茶碗に出合ったのは、やきものも、お茶も知らなかった若い頃。各地を行脚ちんぽうして、東北から帰る途中、自分で何かを始めようという思いを持っていたときでした。ふらっと入った美術館で観た井戸茶碗が、何か粹すみがって坐禅ざぜんなんかをしている自分よりも、ずっと達観たつかんしているように感じました。「生活即禅」、その凝縮された何か、一碗の中に入っているような気がしました。

この「対馬」は、土はいい加減なんですね。そこらへんの土を使って、石が少々入っているような轆轤りくろを挽いたんでしょう。ひっぱり上げて作るもんだから、土も釉ぐすりも密度にムラが出る。釉は一回掛けで薄い。そうすると、百年、二百年経つと変化や味が出てくるんです。陶工の手が自然に動いているということ、それにはとにかく作るしかない。自分のイメージがココ(頭)にあつて、それに向かって作り続けるしかないみたいですね。

失敗したのを手直ししようとしてもダメなんです。ダメだったら次、次、次。この対馬

を作った陶工も、似たような心境だったんじゃないかと思えます。

考えて作ってもできないし、貫入が入っていい味になるかどうか、百年、二百年使わなわからん。一碗作ってどうや、と決まることではないんです。とにかく作り続けるしかないみたいです。

つじむら しろう | 1947年、奈良県生まれ。奈良市水間町の山中で作陶活動が続ける。形式にとられない、作品の独自の美意識が国内外で高い評価を得る。